

鳥類

1 山梨県レッドデータブック鳥類におけるカテゴリと要件

カテゴリ及び基本概念	定性的要件
絶滅 Extinct(EX) 県内ではすでに絶滅したと考えられる種	過去に本県で生息したことが確認されており、飼育下等を含め、本県ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種	過去に本県で生息したことが確認されており、飼育下等では存続しているが、本県においては野生ではすでに絶滅したと考えられる種 【確実な情報があるもの】 ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。 【情報量が少ないもの】 ③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR + EN) 絶滅の危機に瀕している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。 絶滅危惧ⅠA類 Critically Endangered (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。 絶滅危惧ⅠB類 Endangered (EN) ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去（30年～50年）の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。
準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリに移行する要素を有するもの。	生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 ②生息条件が悪化している。 ③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 ④交雑可能な別種が侵入している。
情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生息地においても生息密度が低く希少である。 ②生息地が局限されている。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 ④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 ⑤その他カテゴリを判定するに足る情報が得られていない種。

付属資料

<p>絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群 ①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。 ②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>
<p>要注目種 Noteworthy Species (N) 近い将来絶滅危惧に移行しないか、その動向を注目の必要のある種</p>	<p>次のいずれかに該当する種 ①分布が局限されている種、その他遺伝的、形態的に特異な種。 ②各部会において学術上、自然保護上注目すべきと判断された種。</p>

2 山梨県における生息種及び分布状況の概要

日本鳥類目録改定第7版において、日本の野鳥は24目81科290属633種が報告されており、本県においては山梨県鳥類目録（2011年）において21目57科236種が報告されている（外来5種を除く）。その後もカメラ機器の普及と撮影人口の増加等により確認種も増え、現在は266種（外来5種を除く）が確認されている（2016年12月31日時点）。

鳥類は自然環境や地理的条件と密接な関係にあり、本県は海を有しない環境ではあるものの、海拔80mから3,776mまでの標高差があり、生息する鳥類も平地に分布する種から高山帯に分布する種まで、幅広い垂直分布を示していることが特徴となっている。

自然環境的には、山梨県は県土の約78%を山林が占め、低山帯から高山帯まで環境変化に富んだ森林が多く存在している。そのため、海洋性の鳥類はほとんど見られないかわりに、森林性の鳥類種が豊富となっているのが特徴で、特に南アルプスの3,000m級の高山帯には氷河期の生き残りと言われるライチョウが、奥深い渓谷沿いの崖にはイヌワシが生息していることも特筆すべき事項である。

また、北富士地域には富士五湖があることから多くのカモ類などが渡来し、甲府盆地周辺部より種類数、個体数ともに多くなっており、さらに、富士山麓周辺部には演習場や牧場、牧草地などが広がり、高原の開けた草地を好む種の生息場所となっている。

3 調査概要

レッドリスト種の選定に関しては、既存文献の解析だけでは客観性に欠け、明確な確認記録も少ないことから、やまなし野鳥の会及び山梨県猛禽類研究会の各会員などが集積した記録をデータベース化し、それらを補足するための現地調査を行った。また、必要に応じて写真撮影、音声の記録などを行って精度を高めた。

既存文献調査については、前回のレッドデータ作成時に収集した過去30年以上前のものを見直すと共に、既存情報調査については各会の観察記録などを収集、整理しデータベース化を行った。

また、現地調査については、平成28年度に前回のレッドデータ記載種を中心に、種毎に担当者を割り当て、過去の出現データを基に現地にて繁殖期、非繁殖期においてラインセンサスと定点センサスを実施した。さらに、平成29年度上半期には、より精度を高めるための補完調査も行った。

4 レッドリスト種の選定経過

掲載種の選定に当たっては、

- (1) 迷鳥は除く
- (2) 冬鳥については、冬期に3週間以上にわたって同一場所で生息が認められ、同地域で越冬しているもののうち希少な種
- (3) 夏鳥については、その種の繁殖期間内に最低3週間以上同一場所に生息し、囀り・巣材運び・求愛行動などの確認により、同地域で繁殖していると考えられるもののうち希少な種
- (4) 記録が極めて稀（情報不足）で判断が困難の種は対象とする

という4つの基準を基に、既存文献調査結果と既存情報調査結果に基づき前回の指定種を再度見直した。

最終的な種の抽出については、分布状況・個体数密度・現在の生息状況及び過去からの個体数変化など

を勘案し、カテゴリーの変更、選定を行った。

なお、分類に関しては、日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会・2012）を採用した。

5 選定結果

絶滅危惧ⅠAに3種、ⅠBに9種、絶滅危惧Ⅱ類に10種、準絶滅危惧に19種、情報不足に18種を選定した。

6 減少の主な要因と今後の保護策の提言

今回の調査と前回の調査を比較すると、種数・個体数共に大きな変動は見られなかったが、増加した種と減少した種がみられ、環境の変化が原因の一つとして考えられる。

たとえば、明るい広葉樹林を好むキビタキなどの夏鳥の生息域の拡大と個体数の増加が見られたが、特に低山帯において、松くい虫の蔓延によるアカマツの枯死により、コナラ・クヌギなどを中心とした広葉樹が生育したことが一因として考えられる。

逆に河川敷においては、川岸や中州の草地化等により砂地に営巣するコアジサシ等の減少、護岸のコンクリート化により営巣場所を消失したヤマセミなどの減少が顕著であった。

絶滅種に選定した59種は生息環境も繁殖条件も多様であるが、一般的な今後の保護策として、山林においては単一の樹林帯には変化をもたせた植林を行い、多様な環境をつくりだし、荒廃農地や放置山林の整備を行うことで生息環境や餌環境を改善していくことが必要であると考えられる。

水辺環境についても、餌となる小魚や水生生物が生息できるような流れに変化のある河川環境の創設、人工的な砂礫を中心とした中州等の設置など、変化に富んだ河川環境の復元を行うことが必要であると考えられる。

また、生息はできても繁殖環境が少なくなってきたフクロウ類やブッポウソウなどについては、自然樹洞の代替として巣箱の設置が有効であると考えられる。

やまなし野鳥の会

ライチョウ

キン科

Lagopus muta

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

種の解説 全長約 37cm、雄の夏羽は背面と首が暗褐色で腹部は白く、目の上には赤い鶏冠がある。雌の夏羽の背面は黄褐色と黒と白の横斑。冬羽は共に全身白色。足には羽毛が生えている。主に地上で生活し、6月頃ハイマツ林等の地面に浅い窪みを作り5～7個の卵を産む。主な食物は植物の芽や種子等であるが、夏には昆虫なども採餌する。

分布 北半球の亜寒帯と寒帯に広く分布し、ツンドラ地帯や高山帯に生息する。日本では本州中央部の日本アルプスなどに生息する。

生息環境 標高 2,400m 以上の森林限界上部の、ハイマツ林や雪田植生に生息するが、厳冬期には亜高山帯にも移動する。

生息状況及び危機要因 留鳥。1980年代の南アルプスの生息調査では、約 700羽と推定されていたが、現在では約 300羽に減少。県内では白根三山、仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳などで確認されているが、数は少ない。特に北岳周辺の個体数の減少は深刻である。要因はテン、キツネなどによる捕食、ニホンジカ、ニホンザルなどによる生息環境の攪乱などが考えられるが、特定はされていない。52-4 (捕食 (在来種による)) 61 (局所分布)

特記事項 国指定天然記念物 山梨県希少野生動植物種の保護に関する条例 定性的要件①②

イヌワシ

タカ科

Aquila chrysaetos

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

種の解説 全長雄約 80cm、雌約 90cm、翼を広げると 2m 以上になる。日本の山岳地帯で繁殖するタカ科の中では最大種。雌雄同色で全体的に黒褐色、成鳥では頭頂から後頭部にかけて金褐色に見え、幼鳥では飛翔時に両翼と尾羽の白斑がよく目立つ。通常 2卵を産むが、2羽とも巣立つことは稀で、強い 1羽が生き残り巣立つことがほとんどである。

分布 北半球に広く分布し、国内では北海道から九州まで見られる。県内では自然が豊富な山岳地帯に生息する。

生息環境 低山帯上部から亜高山帯の山岳地帯に生息し、大きな岩棚や大木などに営巣する。

生息状況及び危機要因 留鳥として亜高山帯以下の山岳地帯に生息。県内では富士山麓・秩父山系・南アルプスなどで確認されているが、ほとんどが親別れた移動中の若鳥と思われ、繁殖しているのは数番である。61 (局所分布)

特記事項 国指定天然記念物 定性的要件①②

チゴモズ

モズ科

Lanius tigrinus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 全長 18.5cmほどで、モズとほぼ同じ大きさ。頭上は青白色、背及び尾は赤褐色で黒色の横斑があり、翼は黒褐色、白斑は見られない。腹部は白色で雌のわき腹には褐色横斑が見られる。低木の茂み・樹上などに営巣し、昆虫・小型の爬虫類等を捕食する。

分布 冬季は中国南部やフィリピン、スマトラ島などで越冬し、夏季には本州の東北地方から中部地方に局地的に分布する。

生息環境 低地の林、低山帯上部の林に生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥として渡来する。1970年代には甲府市内の学校の敷地内でも繁殖記録があったが、ここ 20年ほどは正確な確認記録はない。99 (不明)

特記事項 定性的要件①

オオヨシゴイ サギ科

Ixobrychus eurhythmus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IA類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長38cmほどで、ヨシゴイより大型。背面は赤褐色、腹面は淡褐色で、雄は喉から胸にかけて黒い縦線が1本入る。尾羽は黒い。動物食で魚類、両生類、昆虫類、甲殻類などを捕食する。

分布 中国北部、ロシア南東部、朝鮮半島などで繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では北海道や本州中部以北に渡来し繁殖する。

生息環境 湖沼や周りにヨシ原などがある水田、湿性草原などに生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。盆地内、富士五湖地方で保護記録があるが、確実な生息情報はなく、生息状況については不明である。12(湖沼開発) 13(河川開発) 15-1(湿地開発)

特記事項 定性的要件①②⑤

ミゾゴイ サギ科

Gorsakius goisagi

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧I B類 (EN)

種の解説 全長49cmほどで、カラスより一回り小さい。頭は黒褐色で体の上面は暗赤褐色、喉には細く黒い縦斑が入る。夕暮れから夜間にかけて「ポーポー」と繰り返す鳴き、地表を歩きながら、昆虫・サワガニ・ミズミズなどを捕食する。夜行性と言われているが、日中でも活動し、林道脇などで採餌中の姿を見かけることがある。

分布 本州以南の日本で繁殖し、冬季はフィリピン以南で越冬する。

生息環境 沢沿いのよく茂った里山や低山に生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内全域の低山に分布していると思われるが、夕暮れから夜間に鳴くために確認情報はそれほど多くない。毎年数例の生息確認があるが、里山の開発、中山間地の水田の荒廃等による影響が懸念される。11(森林伐採) 99(不明)

特記事項 定性的要件①②

タマシギ タマシギ科

Rostratula benghalensis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧II類 (VU)

種の解説 体長雄約23cm、雌約28cmで雌のほうが大きい。雄雌ともに目の周辺の白、胸脇の白線と背中中の黄色い線が目立つ。鳥類では珍しく雌のほうが目立ち、雄は灰緑色に黄褐色のまだら模様がある地味な羽色だが、雌はのどから胸にかけて赤褐色となる。一妻多夫で雄が抱卵、育雛を行う。水田や浅い水辺で水生昆虫やミズミズなどを捕食する。

分布 インド、東南アジア、中国、アフリカ、オーストラリアに分布。県内では甲府盆地周辺部の河川、水田地帯で少数が確認されている。

生息環境 水田、水張り休耕田、浅い湖沼や河川に生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。近年は甲府盆地の南部の水田地帯で移動中と思われる少数が確認されているが、水田や湿地の減少により生息数は減少していると考えられる。13(河川開発) 15-2(圃場整備)

特記事項 定性的要件①②

チュウビ タカ科

Circus spilonotus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長55cmほどで、カラスよりやや大きい。雄は茶褐色の強いものから、灰色をおびたものまで羽色に変異が多い。両翼を浅いV字型に保ち、滑翔とゆったりしたはばたきを繰り返しながら、ヨシ原の上を低空飛翔し、ネズミや小鳥などの小動物を捕食する。

分布 主にロシア南東部などで繁殖し、日本、東南アジアにかけて越冬するが、国内でも少数の繁殖が確認されている。県内では冬季に牧草地や河川のアシ原などで確認されている。

生息環境 大きな河川や湖沼、農耕地、草地などの開けた環境に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。八ヶ岳山麓や富士山麓の草地、笛吹川、釜無川等の大きな河川沿いで少数が確認されるが、長期にわたり確認されることは稀で、ほとんどが通過中の個体だと思われる。12（湖沼開発） 13（河川開発）

特記事項 定性的要件①②

クマタカ タカ科

Nisaetus nipalensis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 全長雄約72cm、雌約80cm、翼開長は170cm前後。トビより大きく雌雄同色で、背面が暗灰褐色、腹面は淡茶色で喉から胸に黒色に縦斑、胸から下には淡茶色の横斑がある。飛翔時には翼下面に太い黒褐色の鷹斑が目立ち、後頭部に冠羽がある。木の枝上に止まることが多く、ノウサギやヤマドリ、森林性の中小動物を捕食する。通常1卵しか産卵せず幼鳥の養育期間は1年以上に及ぶことから、繁殖は2年に1回しか行わない。

分布 北海道から九州まで分布する。巨木と深い谷のある山地帯に好んで生息するため、県内では、山岳地帯のほぼ全域で見られる。

生息環境 低山帯から亜高山帯の山地に広く生息し、コメツガ・アカマツ・モミなどの比較的大きな木に営巣する。

生息状況及び危機要因 留鳥。個体数は多くはないが、県内ではほとんどの山地で生息及び繁殖が確認されており、繁殖に参加していない幼鳥や成鳥も頻りに確認されている。11（森林伐採） 99（不明）

特記事項 近年、管理捕獲等によりシカの駆除が進んでおり、放置された死体を食べるケースも確認され、鉛中毒に侵されている可能性が懸念されている。 定性的要件①②

コノハズク フクロウ科

Otus sunia

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

種の解説 全長20cmほどで、日本産フクロウ類で最小種。雌雄同色であるが褐色型と赤色型がある。褐色型は全体的に灰褐色、腹部には黒褐色・淡朱色・白色などの複雑なまだら模様が入り、赤色型は体全体が赤褐色で同様な模様が入る。頭の上には耳のような羽毛が目立つ。夕暮れから夜間、明方に「ブッ・ポウ・ソー（仏法僧）」と聞きなされる声で繰り返し鳴く。

分布 アフリカ、ユーラシア、インドネシア等の温帯、熱帯域に広く分布。日本には夏鳥として渡来し繁殖するが、本州以南では少数が越冬する。

生息環境 夏鳥。低山から亜高山下部の大きな木の茂った山地に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 1980年代までは県内全域の神社林や巨木のある低山で生息が確認されていたが、近年は確実な生息確認は年間数箇所だけとなっている。11（森林伐採） 99（不明）

特記事項 御坂町檜峰神社のコノハズク生息地（県指定天然記念物） 定性的要件①②

アカショウビン カワセミ科

Halcyon coromanda

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

種の解説 全長 27cmほどで、体の上面は赤褐色、下面は橙色、腰は水色で嘴と足は赤色。渓谷沿いの大きな木のある広葉樹林帯に生息し、早朝や夕暮れ時、曇天の日などにキョロロロと独特の声で鳴く。枯れ木に穴を掘ったり、アオゲラの古巣や、スズメバチの古巣を利用したりして繁殖する。両生類・爬虫類・魚類、サワガニなどを捕食する。

分布 東南アジアで越冬し、夏鳥として渡来し繁殖する。

生息環境 渓谷沿いのよく繁った広葉樹林帯に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。渡りの時期には県内全域で稀に確認される。繁殖期には県内の南の地域数箇所まで生息が確認されており、個体数は少ないものの毎年渡来が確認されている。11（森林伐採） 54（遷移進行・植生変化）

特記事項 定性的要件①②

ブッポウソウ ブッポウソウ科

Eurystomus orientalis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

種の解説 全長 30cm、雌雄同色で頭部は黒褐色、嘴は赤。喉は黒みを帯びた青色で胴体は光沢のある青色の羽毛で覆われ、光の当たり具合により暗緑色に見える。翼には白い斑紋があり飛翔しているとよく目立つ。甲虫類や蟬等の昆虫類を飛翔しながら捕食する。

分布 熱帯アジア、オーストラリア等に分布し、日本には繁殖のため渡来する。

生息環境 大径木のある神社林や低山などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内には5月中旬ごろ渡来するが、分布は局地的で、確認されているのは県東部地域と南部地域のみとなっている。近年、営巣環境整備のために架けられた巣箱による繁殖も確認されている。11（森林伐採） 54（遷移進行・植生変化） 56-2（競争（在来種による））

特記事項 身延町のブッポウソウ繁殖地（国指定天然記念物） 定性的要件①②

アカモズ モズ科

Lanius cristatus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧 II 類 (VU)

種の解説 全長 20cmほどで、額は白く、頭から尾までの上面は赤褐色。眉斑は白く過眼線は黒い。喉以下の下面は白く脇は橙黄色を帯びる。縄張り内の樹上などに止まり、飛翔している昆虫を空中で捕らえたり、地上の昆虫、小動物などを捕食したりする。

分布 日本、中国、ロシア東部、朝鮮半島などで繁殖し、インドやインドネシア、東南アジアで越冬する。

生息環境 灌木などのある標高の高い高原や牧草地周辺に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。八ヶ岳山麓や富士山麓で確認されているが、分布は局地的で個体数は減少している。高原地域の草原の減少等、環境変化のほかに、越冬地の環境変化が減少の要因といわれている。54（遷移進行・植生変化） 99（不明）

特記事項 定性的要件①②

ヨシゴイ サギ科

Ixobrychus sinensis

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 36cmほどで、日本で見られるサギの仲間では最小。雄は頭上が黒く体は黄褐色。飛ぶと風切りが黒く雨覆は黄褐色。雌は頭上が赤褐色で腹部には褐色縦斑がある。外敵が近づくと首をまっすぐに立てて正面を向き、擬態をする。主に小魚を捕食する。

分布 ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で繁殖、東南アジアで越冬する。日本全土に分布するが県内では稀である。

生息環境 河川、湖沼、水田などの水辺に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。1970年代までは富士五湖をはじめ県内の河川で見られたが、近年は確認情報も少なく、個体数は減少していると思われる。12（湖沼開発） 13（河川開発）

特記事項 定性的要件①②

ヨタカ ヨタカ科

Caprimulgus indicus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長 29cmほど、全身暗褐色や褐色で、黒褐色、赤褐色、薄灰色などの複雑な斑紋が入る。この体色は樹上や地上、落ち葉の上などで保護色となる。頭部は扁平で嘴は小型だが横に幅広い。夜行性で「キョキョキョキョキョ」と鳴きながら飛翔し、甲虫類などの昆虫を捕食する。

分布 アジアの温帯から熱帯で繁殖、インドネシア、フィリピン、インドシナ半島で越冬する。国内では九州以北で繁殖し、県内では低山や山地の草原に渡来する。

生息環境 里山から低山帯上部の明るい林、伐採地、高原などの草原に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内に広く分布しているが、開けた場所の地上に産卵するという特殊な繁殖形態のため、伐採地の減少、草原の荒廃等により生息・繁殖環境が悪化し個体数も減少している。11（森林伐採） 16（草地開発）

特記事項 定性的要件①②

シロチドリ チドリ科

Charadrius alexandrinus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 17cmほどで、背面は灰褐色、腹面は白色。額は白い羽毛で覆われる。眼上部に入る眉斑は白い。嘴から眼部を通り後頭部へ続く過眼線がある。胸部側面に斑紋が入り、左右の斑紋が胸部で繋がる個体もいる。風切羽に白い斑紋があり、飛翔時には帯状に見える。

分布 ユーラシア、アフリカの温帯、熱帯域に分布。冬季には北アフリカやユーラシア大陸南部で越冬する。

生息環境 大河川の砂浜・砂礫地などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内では釜無川、笛吹川、富士川等の砂礫地で繁殖が確認されていたが、近年は確認情報もない。砂地や砂礫地の草地化等による環境の変化が影響していると考えられる。13（河川開発） 99（不明）

特記事項 定性的要件①②

オオジシギ シギ科

Gallinago hardwickii

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長 30cmほど、日本に生息するタシギの仲間では最大種。背面は枯草に似て茶褐色、眼上部から後頭にかけて眉状に眉斑が入る。胸は淡褐色、腹面はやや白い。ズビーヤク、ズビーヤクと繰り返し鳴きながら飛び回り、ザザザザーという大きな羽音と共に急降下する独特のディスプレイフライトを行う。

分布 日本やロシアで繁殖し、冬季はオーストラリア、パプアニューギニアなどで越冬する。

生息環境 標高の高い草原や牧草地に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。八ヶ岳山麓や富士山麓などで毎年確認されるが、個体数は少ない。草原や牧草地の荒廃などが減少の原因といわれている。16 (草地開発)

特記事項 定性的要件①②

コアジサシ カモメ科

Sterna albifrons

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 28cmほどで、翼と尾羽がツバメのように細く尖っており、嘴もまっすぐ伸びる。頭は黒く、額・喉・腹面は白、他は薄い灰色。海岸や河川の砂地・砂礫地に営巣する。空中でホバリングをしながら小魚などを探し、急降下して捕獲する。

分布 ユーラシア大陸の中緯度地域で繁殖し、アフリカからオーストラリアにかけての沿岸部で越冬する。日本では本州以南に渡来する。

生息環境 海岸や大河川の砂地・砂礫地に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内では富士川水系の中州等の砂礫地に渡来して繁殖しているが、近年は年々減少し、数つがいの渡来、繁殖が確認されるだけである。13 (河川開発) 99 (不明)

特記事項 定性的要件①②

ハチクマ タカ科

Pernis ptilorhynchus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長 60cmほどで、トビと同等の大きさ。雄の顔は灰青色で虹彩は黒褐色。雌の顔は褐色のことが多く虹彩は黄色。上面は褐色か黒褐色が多い。下面は白色、黒褐色、茶色など個体の色彩変異が多い。雄の飛翔時の次列風切の羽先は黒い帯状。尾羽にも2本の黒い帯斑がある。クロスズメバチ等のハチ類の幼虫や蛹のほか、カエルやヘビなども捕食する。

分布 ロシア東南部から日本にかけて繁殖し、東南アジアで越冬する。

生息環境 農耕地が近隣にある低山帯に渡来し、針葉樹・広葉樹を問わず営巣する。また、オオタカやノスリの古巣を利用し補強して営巣する場合もある。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内の低山帯を中心に広い地域で確認されているものの、個体数はそれほど多くない。11 (森林伐採)

特記事項 定性的要件①②

ハイタカ

タカ科

Accipiter nisus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長雄約 32cm、雌約 40cm、雄はハトくらいの大きさで雌はそれより大きい。雌は名前の通り上面が灰褐色で下面は白く黒褐色の横斑がある。雄は上面が灰青褐色で下面は橙褐色の横斑がある。主にムクドリくらいまでの小鳥類を急襲して捕えるが、ネズミなどの小型哺乳類も捕食する。

分布 ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で繁殖。国内では本州以北で繁殖し、冬季は河川敷などでも見られる。

生息環境 低山帯から亜高山帯の森林に生息し、カラマツやアカマツなどの針葉樹に営巣する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内では亜高山帯以下の山林全域に広く分布し、冬季になると大陸から越冬のために渡ってきたと思われる個体が、盆地内の河川敷や農耕地等で広く確認される。個体数は減少している。11（森林伐採）

特記事項 定性的要件①②

オオコノハズク

フクロウ科

Otus lempiji

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長は 24cmほどで、コノハズクよりやや大きい。全身が褐色で、灰色、黒色の複雑な細かい斑紋があり、後頭には淡褐色の帯状の模様がある。頭部には耳のように見える羽角がある。繁殖期に雄は「ウォウウォウ」「ホッホッホ」と続けて鳴く。

分布 ロシア東部、サハリン、中国東部、東南アジアに分布。日本では北海道は夏鳥、本州は留鳥。

生息環境 平地から山地の林に生息し、冬季には木の洞などを窺とする。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内全域の低山帯で確認情報があるが、個体数は少ない。過去には集団越冬地もあったが現在は見られず、個体数は減少していると思われる。11（森林伐採）

特記事項 定性的要件①②

トラフズク

フクロウ科

Asio otus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長 38cmほどで、背面は灰色に茶色、腹面は黄土色に茶色の縦縞がある。頭の上にはこげ茶色の耳に見える羽角がある。敵が近づくと体を細く伸ばし、木に似せた擬態を行うことがある。

分布 ユーラシア大陸、アメリカ、エジプト、カナダ、メキシコ、日本などに分布する。

生息環境 平地から低山帯上部の森林に生息し、冬季には群れを作って集団で越冬する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内全域に分布すると思われるが、夜行性のため確認情報も少ない。盆地内でも毎年 20 羽以上が集まる越冬地があったが、現在は一羽も見られず、個体数は減少していると思われる。11（森林伐採）

特記事項 定性的要件①②

ハヤブサ

ハヤブサ科

Falco peregrinus

2018：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

種の解説 全長45cmほどで、雌のほうが大型になる。雄雌同色。上面は青黒色で頭部は黒みが強い。下面は白く、上胸に細かい暗褐色の縦斑、下腹～腹、脇、下尾筒に暗灰色の横斑がある。動物食で主としてヒヨドリやハト、カモなどの鳥類を捕食する。

分布 ほぼ全世界に分布。国内では九州以北で繁殖する。

生息環境 県内では平地の河川から山岳地帯にかけての、断崖のある開けた場所に生息する。断崖の窪みなどに営巣するが、市街地のビルなどに営巣することもある。

生息状況及び危機要因 留鳥。盆地の市街地から山岳地帯まで広範囲で小数が確認され、河川敷の断崖や山岳地帯の崖などで数つがいの繁殖が確認されている。13（河川開発） 61（局所分布）

特記事項 定性的要件①②

ウズラ

キジ科

Coturnix japonica

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長20cmほど、丸い体つきで尾は短く、背面は褐色で黒や黄色の横斑、縦斑がある。眉斑は黄白色で腹面は黄褐色に赤茶色の縦斑があり、雄の喉は赤茶色になる。地上性で小昆虫や草本の種子を食べる。

分布 ユーラシア大陸東部、日本（本州中部以北）などで繁殖し、ユーラシア大陸南東部、日本（本州中部以南）で越冬する。

生息環境 平地から山地の草原や農耕地、河川敷などに生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。地上性であり、草本の中を歩いて移動し、驚いた時くらいしか飛翔することはないことから、確認情報は極めて少ない。13（河川開発） 16（草地開発）

特記事項 定性的要件①②⑤

ミミカイツブリ

カイツブリ科

Podiceps auritus

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長33cmほどで、ハトくらいの大きさ。夏羽では頭部と背部が黒、首が褐色で腹部は白、後頭部には帯状の金色の飾り羽がある。冬羽では喉から腹部にかけて白く、顔の白黒の境界は明瞭、他は黒く見える。嘴はまっすぐで先は白い。

分布 北欧から中央アジア、アラスカからカナダで繁殖し、冬季には温帯の海の沿岸や湖沼で越冬する。県内では富士五湖で稀に観察される。

生息環境 海岸沿いや河口、湖沼、大河川に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。県内の観察記録は富士五湖だけである。個体数は少なく稀であるが、他の種に混じって行動していることが多い。12（湖沼開発） 13（河川開発）

特記事項 定性的要件①②

ツミ タカ科

Accipiter gularis

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長30cmほどで、雌はハト大、雄はそれより小さく、日本産タカ科では最小。雌雄ほぼ同色で、上面は暗青灰褐色。雌は褐色味がある。下面は、雄は淡橙色で雌は白色。褐色の横斑がある。虹彩は雄が赤色、雌が黄色。主に小鳥類を捕食する。

分布 北半球に広く分布し、国内では北海道から本州で見られる。県内では盆地から亜高山帯まで広く分布している。

生息環境 平地の林から亜高山帯の山岳地帯に生息し、盆地内では神社や森林にある樹木に営巣する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内の平地から低山帯上部まで広い範囲で確認されているが、近年は個体数が減少している。11 (森林伐採) 52 - 4 (捕食 (在来種による))

特記事項 定性的要件①②

オオタカ タカ科

Accipiter gentilis

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長50～56cmでカラスくらいの大きさ。雌は上面が暗灰褐色、雄では青灰褐色。下面は白色で黒褐色の細い横斑がある。飛行時に鷹斑が見られるが、個体により白くみえる。幼鳥は褐色で下面に暗褐色の縦斑が見られ、飛行時の鷹斑は明瞭。林内や林縁等で主に鳥類を捕食。ネズミやノウサギなどの哺乳類も捕食する。

分布 北半球の亜寒帯から温帯に分布する。国内では北海道と本州の森林で繁殖し、冬季には平地の農耕地や市街地でも見られる。

生息環境 低山帯の森林や丘陵地などで繁殖し、冬季には河川敷や農耕地などにも生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内の森林地帯に広く生息し、近年は冬季の河川敷や農耕地を中心に確認情報も増加していることから、個体数は増加傾向であると思われる。これは近年、営巣可能な森林が増えていることに一因があると思われるが、今後も環境変化による生息状況の推移が注目される。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

サシバ タカ科

Butastur indicus

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長50cmほどで、カラスほどの大きさ。雄雌同色で背面は茶褐色、白い眉斑がある。腹面は白っぽく、胸部から腹部にかけ茶褐色の横斑がある。森林周辺の開けた場所や田畑でヘビやカエル、トカゲ、ネズミなどを捕食する。

分布 中国東北部南部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、中国南部、インドネシアなどで越冬する。県内では低山帯に広く分布し、秋には富士川沿いの県南部地域や青木ヶ原樹海上空を群れて渡るのを見ることができる。

生息環境 アカマツ林があり、周辺部に水田や畑などがある低山帯の森林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内全域の低山帯に広く分布するが、30年ほど前と比べると個体数は減少している。これは、中山間地域の餌場となる耕作地の放棄、松くい虫被害による営巣木の激減などが要因として考えられるが、今後の環境変化による生息状況の推移が注目される。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

フクロウ フクロウ科

Strix uralensis

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 50cmほど、背面は褐色に濃褐色や灰色、白色の斑紋が入り、腹面は白色で褐色の縦斑が入る。頭は丸く、顔はお面のよう
に平たく、周囲はハート型に縁取られる。食性は動物食でモグラなどの食虫類、ネズミなどの小型哺乳類、大型昆虫類などを捕食する。

分 布 ユーラシア大陸北部に広く分布。日本では九州以北に分布する。

生息環境 平地の巨木のある神社などから、低山帯、亜高山帯下部にかけての森林、草原などに生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内全域の大木のある神社仏閣から森林地帯で確認される。近年、営巣に適した洞のある大木が減少して
おり、巣箱を利用した繁殖が報告されている。11（森林伐採） 54（遷移進行・植生変化）

特記事項 定性的要件①②

アオバズク フクロウ科

Ninox sctulata

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 30cmほど、頭部から背面は黒褐色、下面は白色で褐色の縦斑が入る。虹彩は黄色く、嘴は黒い。夕暮れと共に「ホッ、ホッ」
「ホッ、ホッ」と規則正しく二声ずつ鳴く。食性は動物食で、昆虫類、両生類、爬虫類、小型の哺乳類などを食べる。

分 布 中国、日本、朝鮮半島、ウスリー等で繁殖し、冬季は東南アジアに南下して越冬する。

生息環境 平地の大木のある公園や神社仏閣、低山の森林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。山梨県全域で確認情報はあるものの、個体数は減少傾向にある。街中の公園や神社、民家の屋敷林などで
も繁殖しているために、フクロウ科の仲間では最も身近な種である。11（森林伐採） 54（遷移進行・植生変化）

特記事項 定性的要件①②

コミミズク フクロウ科

Asio otus

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 38cmほどで、頭部から背面は褐色に黄褐色、白色のまだら模様。腹面は淡褐色で黒褐色の縦斑が入る。頭上には短い羽角
がある。本来は夜行性だが天気の良い日などは日中でも活発に行動し、雪原でネズミなどを捕食する。

分 布 南北アメリカ大陸、ユーラシア大陸、アフリカ大陸北部などに広く分布。日本にはシベリアや中国から越冬のために渡来。

生息環境 大河川の河川敷、草原、湿地、牧草地に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。盆地内の大きな河川沿い、富士山麓や八ヶ岳山麓の草原や牧草地に渡来する。毎年、確認情報はあるが、
個体数が少なく夜行性であることもあり、確実な生息状況は不明。11（森林伐採） 54（遷移進行・植生変化）

特記事項 定性的要件①②

ヤマセミ カワセミ科

Megaceryle lugubris

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 全長 35cmほどで、ハトほどの大きさ。背面は白と黒のまだらで腹面は白い。雄では胸に黄褐色の帯と黒い斑点があり頭部の冠羽が目立つ。飛翔時の翼の裏は雄では白く、雌は黄褐色。水面に突き出た枝や石の上などから魚を狙い、時には停空飛翔をしてから水中に飛び込んで魚を捕える。

分布 中国、インドシナ半島、ヒマラヤ地方、日本などに分布。日本では全国に分布し、県内では大きな河川、ダム湖、渓谷沿いに分布する。

生息環境 山地の溪流、ダム湖などに生息するが、近年は大きな河川の中流域でも見られ、護岸や山腹の崩壊地に横穴を掘って営巣する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内では大きな河川沿いや渓谷、ダム湖で確認されるが、個体数はかなり減少している。河川の改修、餌となる中型魚類の減少が一因と言われている。12 (湖沼開発) 13 (河川開発)

特記事項 定性的要件①②

コチョウゲンボウ ハヤブサ科

Falco columbarius

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 30cmほどで、ハトくらいの大きさ。雄の背面は青灰色、腹面は淡橙色で褐色の縦斑がある。雌や若鳥の背面は茶色でチョウゲンボウに似ているが、赤みがなく腹部の鷹斑模様は大きい。短い滑翔を繰り返し直線的に飛翔し、スズメなどの小鳥を捕食する。

分布 北半球で繁殖し、冬季は南下して越冬する。県内では大きな河川の河川敷や広い農耕地などに分布する。

生息環境 牧草地、河川敷、農耕地、草地などの開けた環境に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。年により飛来個体数は増減するが、釜無川や笛吹川などの河川敷、また、その周辺部の農耕地などでは、越冬個体が毎年確認されている。12 (湖沼開発) 13 (河川開発)

特記事項 定性的要件①②

サンショウクイ サンショウクイ科

Pericrocotus divaricatus

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 20cmほどで、スズメよりやや大きい。体は細身で尾が長く、背面は暗灰色、腹面は白い。雄は額が白く、頭頂から後頭と過眼線が黒い。「ヒリリー、ヒリリー」と鳴きながら浅い波状を描いて樹上を飛び、小昆虫を捕食する。

分布 日本、ロシア東部、朝鮮半島で繁殖し、冬季は東南アジアに南下し越冬する。県内全域の低山に分布する。

生息環境 低山帯の背の高い落葉広葉樹の多い森林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内全域の低山帯で確認されているが、松くい虫被害によりアカマツが減り、落葉広葉樹の生育が目立ってきた数年前から個体数は増加傾向にあり、生息域も拡大している。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

サンコウチョウ

カササギヒタキ科

Terpsiphone atrocaudata

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長は雄 45cm、雌は 17cmほどで、雄の尾羽は体長の 3 倍くらいある。雄の顔は黒紫色、腹部は白色、背面は赤みのある赤紫色、その他の部分は黒紫色で目の周辺と嘴は明るい水色。「ツキヒーホシ、ホイホイホイ」と聞きなされる独特の鳴き声で囀り、暗い林の中で昆虫類を捕食する。

分布 日本、台湾、ミンダナオ島などに分布。日本で繁殖した多くの個体は中国南部、スマトラ等で越冬する。

生息環境 平地から低山の薄暗い杉林と広葉樹が混じるような林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内の低山の沢沿い等に広く分布するが、個体数は県南部地域が多く、近年は確認情報も増えていて、増加しているものと思われる。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

コシアカツバメ

ツバメ科

Hirundo daurica

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 18cmほど、背面は光沢のある黒、腹部は白や淡褐色に黒褐色の縦斑が入り、下腹に向かって赤褐色やオレンジ色となる。腰は赤褐色やオレンジ色で名前の由来となっている。集団営巣する傾向があり、民家の軒下や橋桁などに入り口が細長い徳利や壺状の巣を作る。

分布 ヨーロッパ南部、中央アジアなどで繁殖し、東南アジア、インド、中国南部で越冬する。日本では九州以北で繁殖する。

生息環境 市街地、河川敷、村落などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内では富士川沿いの県南部地域に生息する。一時期分布を広げ、甲府市内南部などでも繁殖が確認されたが、個体数の減少とともに現在は見られなくなった。99 (不明)

特記事項 定性的要件①②

キレンジャク

レンジャク科

Bombycilla garrulus

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 19cmほどで、体は全体的に灰褐色、頭部には冠羽があり、喉と過眼線が黒く、尾の先は黄色。平地や山地の林に群れで渡来し、ヤドリギ・ナナカマドなどの木の実を食べる。

分布 北半球の寒帯に広く繁殖分布し、日本では本州中部以北に冬季に渡来。県内では市街地や山林で見られるが、数は少ない。

生息環境 平地から山地の林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。渡来個体数は年により変動があり、全く見られない年もある。近年は山中湖や高根町で確認されている。渡来数は繁殖地での繁殖状況や餌となる木の実の結実状況によると言われるが、確認個体数は減少している。99 (不明)

特記事項 定性的要件①②

ヒレンジャク

レンジャク科

Bombycilla japonica

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 体長は18cmほどで、体は全体的に赤みのかかった淡褐色、喉と過眼線が黒く、尾の先は赤い。11月から5月頃まで見られ、ネズミモチ、ニシキギ、ヤドリギ、ノイバラ、ヤツデなどの実を食べる。

分布 シベリア、中国のアムール川、ウスリー川流域で繁殖し、日本、サハリン、朝鮮半島、台湾などで越冬する。

生息環境 平地から低山の林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。県内ではキレンジャクよりも確認個体数は多いが、年によって渡来数は不規則で、多い年には300羽ほどの群れを見ることがあるが、全く見られない年もある。渡来数は繁殖地での繁殖状況や餌となる木の実の結実状況によると言われる。99（不明）

特記事項 定性的要件①②

マミジロ

ヒタキ科

Zoothera sibirica

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長23cmほどで、ムクドリほどの大きさ。雄は全身が黒色、雌はオリーブ褐色で雌雄共に白い眉斑がよく目立つ。雑食性で昆虫類、陸生の巻貝、ミズ、木の実などを食べる。

分布 日本、中国北東部、ロシア東部などで繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では本州中部以北から北海道に分布する。

生息環境 低山上部から亜高山帯の森林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内では東部・北部地域の標高の高い森林地帯で生息が確認されているが、もともと個体数の多い種ではないために確認情報は少ない。11（森林伐採）

特記事項 定性的要件①②

トラツグミ

ヒタキ科

Zoothera dauma

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長30cmほどで、ハトより小さい。頭部から腰や翼などは黄褐色で黒色の横斑や三日月斑がある。飛ぶと翼の裏側に白と黒の帯が見える。林内の地上で、嘴で落ち葉などをはねのけながら、昆虫類やミズなどを捕食する。繁殖期には、夜間に「ヒー、ヒー」と囀る。

分布 シベリア東南部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、インド東部やフィリピンなどで越冬する。日本では留鳥または漂鳥として一年中生息する。

生息環境 低山帯の良く茂った広葉樹林に生息し、繁殖する。冬季には平地の神社、樹木のある公園などに移動する個体も見られる。

生息状況及び危機要因 留鳥。繁殖期の囀りは夜間が多いため確認数は少ないが、冬季において、平地の公園や林縁の果樹園、農耕地などで採餌中の姿を見かけることがある。個体数は減少傾向にある。11（森林伐採）

特記事項 定性的要件①

ミヤマホオジロ

ホオジロ科

Emberiza elegans

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 16cmほどで、雄は眼上部にある眉状の眉斑や喉は黄色で、嘴の基部から眼を通り後頭部へ続く黒い過眼線が入る。胸部には三角形の黒い斑紋が入る。メスは喉から胸部は淡褐色、腹部は汚白色の羽毛で覆われる。

分布 夏季に中国や朝鮮半島、ウスリーなどで繁殖し、中国南部や日本、台湾等で越冬する。

生息環境 平地から低山、丘陵にかけての開けた森林や林縁に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。盆地の周辺部の畑に隣接した開けた林などに渡来し、毎年確認されているが、年により渡来個体数に変動がある。11 (森林伐採) 15-2 (圃場整備)

特記事項 定性的要件①②

ノジコ

ホオジロ科

Emberiza sulphurata

2018：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

種の解説 全長 14cmほど、背面は黄緑色に暗褐色、体側面には褐色や灰緑色の縦縞が入る。尾羽の色彩は黒褐色で、外側から2枚ずつの尾羽には白い斑紋が入る。目の上下に白い輪模様がある。

分布 本州北部で繁殖し、冬季になると中国南東部、フィリピン北部で越冬する。日本のみで繁殖する。

生息環境 低山上部の開けた森林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。県内では富士山麓や盆地北部の標高 500m 以上、広葉樹を中心とした明るい林に生息するが、分布は局地的で個体数も減少している。11 (森林伐採) 15-2 (圃場整備)

特記事項 定性的要件①②

トモエガモ

カモ科

Anas formosa

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
なし

種の解説 全長 40cmほどの小型のカモ。雄の顔には黄白色と緑黒色の特徴のある模様があり、伸びた肩羽は黒くて茶色と白の縁取りがある。胸は褐色で側面には白い縦線が入る。雌は全身茶褐色で黒い斑紋があり、嘴の付根に白くて丸い斑紋がある。

分布 中国、モンゴル、ロシア東部などで繁殖し、日本、朝鮮半島、台湾などで越冬する。

生息環境 湖沼、大河川などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士五湖、盆地内の河川、湖沼などでごく稀に確認記録があるが、数は少なく他種に混じって行動する単独個体の確認のみである。12 (湖沼開発) 13 (河川開発)

特記事項 定性的要件①⑤

クイナ クイナ科

Rallus aquaueus

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 30cmほどで、背面は褐色や暗黄褐色、羽軸に沿って黒い斑紋が入り縦縞状に見える。顔から胸部にかけての羽衣は青灰色。体側面や腹部、尾羽基部の下面は黒く、白い縞模様が入る。雑食で昆虫類、魚類、種子などを食べる。

分布 ユーラシア大陸の湿地帯に分布、国内では東北地方から北海道の川沿いや湿地帯で繁殖し本州中部以南で越冬する。

生息環境 河川敷や湖沼周辺、湿地などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。地上性でほとんど飛ぶこともなく、草の中を移動するため、確認情報は極端に少なく生息状況は不明である。13 (河川開発) 15 - 1 (湿地開発) 16 (草地開発)

特記事項 定性的要件①②

ヒクイナ クイナ科

Porzana fusca

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 20cmほど、背面は褐色や暗緑褐色で喉は白や汚白色。胸部や体側面は赤褐色。腹部の羽衣は汚白色で、淡褐色の縞模様が入る。動物食の強い雑食で、昆虫、軟体動物、甲殻類、両生類、種子等を食べる

分布 中国東部、台湾、日本などで繁殖し、冬季になるとインドシナ半島、中国南部、日本（本州中部以南）で越冬する。

生息環境 河川敷や湖沼、湿地、水田などに渡来し、生息。

生息状況及び危機要因 夏鳥。地上性で開けた場所には姿を見せないため生息確認は少ないが、平地の葦原があるような河川や水田では少数だが確認されている。13 (河川開発) 15 - 1 (湿地開発) 16 (草地開発)

特記事項 定性的要件①②

ハリオアマツバメ アマツバメ科

Hirundapus caudacuta

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 21cmほどで、体型は太く、尾羽は短く針のように羽軸が飛び出している。全身黒褐色で額や喉、腹部から下尾筒にかけては白い。1日の大部分を飛行しており、地上に降りることはない。食性は昆虫食で大きく口を開け、飛翔しながら獲物を捕食する。

分布 ユーラシア大陸東部、日本で繁殖し、冬季にはオーストラリア、パプアニューギニア等へ南下して越冬する。

生息環境 亜高山帯の森林、高山帯などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 夏鳥。早川町、北杜市、甲府市など、県内の高山で確認されており、ダムなどで飛翔しながら水を飲む姿が確認されている。また、春秋の渡りのシーズンには平地の上空を小群で通過していく姿が見られる。99 (不明)

特記事項 定性的要件①②

ヤマシギ シギ科

Scolopax rusticola

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 35cmほどで、ハトくらいの大きさ。背面は赤褐色、黒、灰白色の複雑な模様があり肩羽の外側には灰白色の縦線がある。平地や沢沿いの山林に生息し、曇天の日や夕方には農耕地などで昆虫類やミズ等を捕食する

分布 ユーラシア大陸中緯度地域で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカの地中海沿岸、東南アジアで越冬する。日本では北海道で夏鳥、本州中部以北と伊豆諸島で留鳥、それ以南では冬鳥として分布する。

生息環境 平地から沢沿いの森林、山間地の農耕地などに生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。地上性であることと、半夜行性であるため確認情報が少なく、生息状況は不明である。13 (河川開発) 25 (ダム建設)

特記事項 定性的要件①②⑤

アオシギ シギ科

Gallinago solitaria

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 30cmほどで、背面は褐色でタシギに似ているが、一回り大きく、顔や腹部の白色部分が薄い青灰色を帯びている。食性は動物食で、水中に長い嘴を差し込んで昆虫類やミズ等を捕食する。

分布 中国、サハラ、ヒマラヤなどで繁殖し、インド、パキスタン、中国南部、日本などで越冬する。

生息環境 山沿いの溪流、山間部の水田、湿地などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。個体数は少ないと思われ、近年、確実な生息確認はなく、生息状況は不明である。13 (河川開発) 25 (ダム建設)

特記事項 定性的要件①②⑤

ミサゴ ミサゴ科

Pandion haliaetus

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長雄約 55cm、雌約 63cm、トビくらいの大きさ。背面は首から下が黒褐色、頭部と腹面は白色、胸は茶褐色で翼は細長く下面は白く見える。水面上を飛翔し、時に停空飛翔を行って狙いを定め、水中に飛び込み魚類を捕食する。

分布 北半球で繁殖し、南半球で越冬する。日本では全国に生息し、局地的に繁殖も行っている。

生息環境 海岸や河川、湖沼、山間部の池やダム湖などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 漂鳥。繁殖期にペアでの観察記録もあるが、県内では繁殖は確認されていない。毎年、河川沿いや湖沼での確認記録はあるが、定着している様子はなく、移動個体の通過だと思われる。12 (湖沼開発) 13 (河川開発)

特記事項 定性的要件①②

オジロワシ

タカ科

Haliaeetus albicilla

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長雄約 80cm、雌約 90cm、翼を広げると 2m を超えトビよりはるかに大きい。雌雄同色で、全体的に淡褐色、頭部はやや淡色で尾羽は白色。河川、湖沼、海などで主として魚類を捕食する。

分布 ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季には南下して越冬する。北海道の一部では繁殖する個体もいる。

生息環境 大きな河川、湖沼、海岸沿いに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士川流域や富士五湖地方で稀に確認されるが、移動途中と思われ、短期間の確認がほとんどである。12(湖沼開発) 13(河川開発)

特記事項 定性的要件①②

オオワシ

タカ科

Haliaeetus pelagicus

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長雄約 90cm、雌約 102cm、翼を広げると 2m を超えトビよりはるかに大きい。雌雄同色、成鳥は全体的に黒色で尾羽、肩、腿、嘴の付根が白色。若鳥は全体的に黒褐色で尾羽が白い。河川、湖沼、海などで主として魚類を捕食する。

分布 オホーツク海沿岸周辺で繁殖し、冬季は朝鮮半島、日本の関東以北などで越冬する。

生息環境 大きな河川、湖沼、海岸沿いに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士川流域や富士五湖地方で稀に確認されるが、移動途中と思われ、短期間の確認がほとんどである。12(湖沼開発) 13(河川開発)

特記事項 定性的要件①② 早川町内の山中にて滑落死した鹿の死体を食べている姿を確認しているため、山岳地帯を放浪している個体もいる可能性がある。

ハイロチュウヒ

タカ科

Circus cyaneus

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長雄約 45cm、雌約 50cmで、カラスよりやや小さい。雄は翼の先が黒く、全体が灰色、腰と腹部は淡灰色。雌の背面は褐色で、腹面には淡褐色に褐色の縦斑がある。草地の上空を低く滑空しながら、ネズミや鳥類などを捕食する。

分布 ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカで繁殖し、それ以南で越冬する。日本には越冬のため冬鳥として渡来するが局地的である。

生息環境 大きな河川、農耕地、牧草地などに渡来し生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士川水系の河川敷などで稀に確認されるが、通過個体と思われる。富士山麓周辺では数は少ないものの越冬個体も確認されている。12(湖沼開発) 13(河川開発) 16(草地開発)

特記事項 定性的要件①②

オオアカゲラ

キツツキ科

Dendrocopos leucotos

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 28cmほどで、背面は黒く白い横縞が入り、腹部や下尾筒は赤味がかかる。雄の成鳥の頭頂は赤く、雌は黒い。食性は雑食で、甲虫の幼虫、節足動物、陸棲貝類、果実、種子などを食べる。通常は樹上で採食するが、冬季などは地上で種子などを採食する。

分布 ユーラシア大陸の亜寒帯に分布。日本には 4 亜種が分布する。

生息環境 低山帯上部以上の、巨木があり枯れ木の多い森林に生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内全域の標高 800m 以上、巨木のある森林で確認されているが、アカゲラと比べ個体数も少なく、分布は局地的である。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②⑤

ヤイロチョウ

ヤイロチョウ科

Pitta nympha

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧IB類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 18cmほどで、雌雄同色。背面は緑色、喉から胸、体側面は淡黄色。腹面や下尾筒は赤く尾羽は黒で先端は青い。食性は動物食で、ミミズ、昆虫、甲殻類などを地上で捕食する。

分布 日本、ボルネオ島、台湾、中国、マレーシアなどで繁殖し、中国南部、インドネシアなどで越冬する。また、継続的な繁殖が確認されているのは日本だけである。

生息環境 高木の樹冠により日光が遮られるような薄暗い林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 1900 年代には移動の途中と思われる個体が確認がされているが、近年は確認情報も全くなく、生息状況は不明である。11 (森林伐採) 99 (不明)

特記事項 定性的要件①⑤

キバシリ

キバシリ科

Certhia familiaris

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 15cmほどで、背面は褐色、白色のまだら模様があり木の樹皮に似ている。腹面は白色、尾は褐色で長い。嘴は細長く下方に湾曲している。木の幹などに住む小さな昆虫類やクモを、木をらせん状に上下しながら捕食する。

分布 日本、ユーラシア大陸、アメリカ大陸の温帯から亜寒帯に分布する。

生息環境 低山帯上部から亜高山帯の針葉樹林に生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。県内全域の標高の高い森林で確認されている。冬季にシジュウカラなどのカラ類と共に行動する姿を見かけるが、個体数も少なく目立たないため確認情報は少ない。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

ベニヒワ アトリ科

Carduelis flammea

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 13cmほどで、背面、体側面は灰褐色で黒や褐色の細かい縦縞が入る。眼先は黒く尾は黒褐色、額には赤い斑紋が入り、特に雄の成鳥は胸や額も赤くなる。飛翔すると翼の 2 本の白線が目立つ。

分布 北アメリカ大陸やユーラシア大陸の北部で繁殖。日本では本州中部以北に冬季に渡来するが、年により飛来数の変動が激しい。

生息環境 低山帯上部や亜高山帯の針葉樹林や草原に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士五湖方面、八ヶ岳山麓などで確認されるが、年により見られる年と全く見られない年がある。個体数も少なく変動も大きなことから生息状況は不明である。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①⑤

オオマシコ アトリ科

Carpodacus roseus

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 体長 17cmほどで、雄成鳥は頭部、背面、胸から腹部にかけては鮮やかな紅色、額と喉には銀白色が入る。雌は全体に淡褐色で頭部、背面、胸、腹面が淡く紅色になる。小群で行動し、林道脇のハギ類の種子などを食べる。

分布 シベリアの亜寒帯地域で繁殖し、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本などで越冬。年により飛来数は変動する。

生息環境 低山帯上部の開けた林、林縁、林道沿い、農耕地などに渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。県内全域の標高 700m 以上の低山で毎年記録はあるが、渡来数は年により変動があり、生息状況は不明である。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①⑤

イスカ アトリ科

Loxia curvirostra

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 18cmほどで、雄は翼と尾は黒褐色で、全体的に暗赤色。雌は額から背面がオリーブがかった緑色、腹部は黄白色、羽は黒灰色。嘴は上下ともに伸長して湾曲しており、左右互い違いになり、マツやモミなどの針葉樹の種子を取り出しやすくなっている。

分布 ヨーロッパ、アジアの北部から北アメリカに分布。日本には主に冬鳥として渡来するが年によって変動がある。少数は日本でも繁殖する。

生息環境 低山帯上部のアカマツを中心とした針葉樹林に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 冬鳥。富士山麓、八ヶ岳山麓、甲府市北部などの低山帯上部から亜高山帯にかけて確認されている。確認個体数は年により変動があり生息状況は不明である。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

クロジ ホオジロ科

Emberiza variabilis

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
なし

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 17cmほどで、雄は全体的に灰黒色で背面に黒褐色の斑紋があり、雌は灰褐色で腹部に褐色の縦斑がある。繁殖期には主として昆虫類を捕食し、それ以外の時期には地上で植物の種子を食べる。

分布 カムチャッカ半島南部、千島列島、サハリンで繁殖し、中国東部などへ渡る。日本では本州中部以北に留鳥として生息するが、北海道では夏鳥、本州中部以西では冬鳥である。

生息環境 低山帯上部から亜高山帯のササのよく茂った森林に生息する。

生息状況及び危機要因 留鳥。富士山麓や八ヶ岳山麓で繁殖期・非繁殖期に確認されているが、個体数は少なく生息状況は不明である。11 (森林伐採) 54 (遷移進行・植生変化)

特記事項 定性的要件①②

コジュリン ホオジロ科

Emberiza yessoensis

2018：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー
情報不足 (DD)

種の解説 全長 14cmほどで、雄の夏羽は頭部から喉にかけて黒く、胸から腹面は淡灰褐色、腰は赤褐色。雌は頭頂部が暗褐色、眉斑や頬線は黄褐色、腰は灰褐色で腹部は白色。食性は雑食性で昆虫類などの節足動物、種子などを地上で採食する。

分布 中国北部やウスリー等で繁殖し、朝鮮半島、中国南部で越冬する。日本では本州中部以北、九州の一部に局地的に分布する。

生息環境 河川、湖沼等の草原、アシ原に渡来し、生息する。

生息状況及び危機要因 漂鳥。過去には盆地の河川敷、水田などで渡りの時期に確認された記録があるが、近年は確認情報もなく、生息状況は不明である。15-2 (圃場整備) 16 (草地開発)

特記事項 定性的要件①⑤

鳥類執筆者（五十音順敬称略）

青木進、大倉昌幸、窪田茂、小林美博、杉原廣、中村司、藤原正貴

鳥類調査員（五十音順敬称略）

青木進、一瀬邦彦、井上史子、大倉昌幸、長田佳礼、笠井雅人、窪田茂、小林美博、渋谷秀夫、杉原廣、中村司、野澤久、樋口直人、藤原正貴、村山力、依田正直

鳥類参考文献一覧

- 羽田健三・中村浩志・小岩井彰・田島一善. 1985. 南アルプス白根三山におけるライチョウのなわばり分布と生息個体数
- 環境省. 2017. 絶滅の恐れのある野生生物の種のリスト
- 身延町. 2015～2016. 身延町ブッポウソウ繁殖地生息調査
- 中村司・依田正直. 1977. 山梨の鳥. 山梨日日新聞社
- 中村幸雄. 1969. 甲斐の鳥たち
- 日本鳥類目録 改定第7判. 2012.
- 日本野鳥の会. 2015. フィールドガイド日本の野鳥
- 日本野鳥の会甲府支部・やまなし野鳥の会. 2011. 山梨県鳥類目録 Vol. 1
- 日本野鳥の会甲府支部・やまなし野鳥の会. 2012～2016. 野鳥生息状況調査及び繁殖状況調査
- 山梨県. 2006～2016. 山梨県カモ科鳥類調査
- 山梨県. 2006～2016. 山梨県鳥獣保護区等の環境整備及び設定効果測定調査
- 山梨県. 2006～2016. 山梨県鳥類モニタリング調査
- 山梨県教育委員会. 1972. 山梨県の主要動植物

